



間質性肺炎の包括医療の試み



正確な診断と適切な治療の取り組み

間質性肺炎は、呼吸器疾患のなかでも診断や治療が難しい疾患の1つです。間質性肺炎によって炎症や線維化が進むと、酸素の取り込みが悪化し、呼吸不全を引き起こします。間質性肺炎の診療には①原因を特定し、②包括的な治療を行い、③全人的なサポートを提供することが求められます。①原因を特定するために、当院では高い診断率が期待されるクライオ生検を実施しております。気管支鏡専用の検査室を持ち、安全な鎮静モニタリングや合併症への対応体制を整え、専任のスタッフがサポートいたしますので、安心して検査を受けることができます。採取した検体は、呼吸器・アレルギー内科や呼吸器外科、病理診断科、放射線科の専門医が連携し、診断や治療方針を協議します。②包括的治療は薬物治療だけでなく、リハビリテーション、栄養指導、服薬指導をとおして多職種で問題の解決を目指します。近年の研究で呼吸困難がリハビリテーションによって改善する可能性や、栄養状態と予後の関連が報告されております。当院独自の取り組みとして、教育・リハビリテーション入院を提供し、QOLの改善や栄養指導も含めた多職種支援を行っております。③全人的サポートは患者さんの置かれる社会的立場、心理状態も含めて対応いたします。医療助成の情報提供や進行期のサポートは患者さんに応じた対応が求められますので、各関連部門と連携して進めております。当院では患者さんの思いに寄り添い、病状に合った治療を提供いたします。地域の先生方、間質性肺炎が疑われる患者さんがおりましたら私たちにお任せいただけますよう、よろしくお願いいたします。

呼吸器・アレルギー内科 助教
中村 祐介

間質性肺炎は専門医でも診断や治療に苦慮することがあります。現在では治療も多様化しており、判断に悩まれる場合は、当院にご紹介いただければと思います。休日は釣りや水族館などに出かけるなど、大好きな魚とふれあって心身のリフレッシュを図り、穏やかな心持ちで患者さんに向き合えるよう心がけています。



① 専門医を中心とした多職種チームが連携し、診断と治療を行う。
② 教育やリハビリテーションプログラムを通して患者さんを支援。

獨協医科大学病院
Dokkyo Medical University Hospital
〒321-0293 栃木県下都賀郡壬生町大字北小林880
TEL:0282-86-1111(代表)

呼吸器外科 外来受付電話/外来直通 TEL:0282-87-2206
呼吸器アレルギー内科 外来受付電話/外来直通 TEL:0282-87-2197



獨協医科大学 創立50周年記念事業

50th Dokkyo Medical University

50周年記念事業に関するお問い合わせはこちらまで
獨協医科大学創立50周年記念事業推進室 企画広報部内
TEL:0282-87-2107

DOKKYO MEDICAL SCOPE

— 獨協の今を識る — vol.7

生きる力に寄り添う
最新の呼吸器治療



重症COPDに対する集学的治療



新たな選択肢として注目されるバルブ治療



進行性の呼吸器疾患である慢性閉塞性肺疾患(COPD)は、咳や痰の症状で始まり、重症化すると体動時の息切れが生じるなど、日常生活に大きな支障を来してしまいます。治療には禁煙、原因回避が原則ですが、吸入剤やリハビリテーションを主軸に、症状が進行した場合は在宅酸素療法も併用します。薬物治療を施しても呼吸困難が改善されず、肺が高度に気腫化した場合は、外科的治療が必要となり、患者さんによっては肺移植を検討する場合があります。従来の外科的治療は体への負担やリスクを伴いますが、この重症COPDに対し新たな治療として注目されているのが、気管支鏡的肺容量減量術(BLVR)です。気管支バルブ治療は、小さな気管支バルブを用いて、換気の制御によって肺の負担を軽減させる治療法です。気管支鏡を使用して、それらの器具を設置する非侵襲的治療のため、今までの外科的治療に比べ、患者さんの負担を抑えることができます。この治療の適応は、異常換気を伴う重症COPD患者さん、特に非均一型の気腫がある患者さんが適応となり、在宅酸素療法で酸素を使われている患者さんも、検査結果によって施行が可能です。この治療法は海外では10年以上前から行われており、呼吸機能の改善や運動耐容能、生活の質の向上が望めると報告されています。

当院は、呼吸器内視鏡として気管支鏡と胸腔鏡の両者を扱う全国初の専門センター「獨協医科大学病院 呼吸器内視鏡センター」を備え、全国でこの治療を行っている14施設のうちの一つとして、高度かつ先進的な診察と治療を行っております。患者さんが健康な生活を維持するための重症COPDに対する治療法の新たな選択肢として、地域の先生方におかれましては、ぜひ当院にお気軽にご相談いただければ幸いです。

獨協医科大学病院 呼吸器内視鏡センター

呼吸器・アレルギー内科のほか呼吸器外科、耳鼻咽喉・頭頸部外科、上部消化管外科の医師が検査を担当。日本呼吸器内視鏡学会認定施設として、気管支鏡専門医と指導医が所属し、診断精度の高い検査を実現している。早くから導入したクライオ生検は実績も豊富で、気管支鏡検査数においては年間約600件と、全国トップクラスの症例数を誇る。



間質性肺炎に対する肺移植



万全のチーム医療で患者さんをサポート



呼吸器・アレルギー内科 教授
清水 泰生

気管支鏡を用いた、重症肺気腫による呼吸苦を軽減できる治療が保険適応となりました。地域の先生方と連携し、患者さんの呼吸苦軽減に寄与できたら幸いです。趣味のジョギングで心身をリセットし、医療や患者さんに向き合うエネルギーに変えています。



呼吸器外科 准教授
中島 崇裕

バルブ治療は北関東では当院のみ実施しておりますので、いつでもお問い合わせください。多忙な毎日ですが、家族時間で感じる3人の子どもの成長を励みに、心に串が刺さった状態である“患者さんの“串”を取り除けるような治療を目指しております。

肺移植は、呼吸不全となった患者さんの機能回復を図る治療です。肺移植の方法には、患者さんの両肺を摘出し脳死ドナーの両肺と置き換える「脳死両肺移植」、患者さんの片肺を摘出し脳死ドナーの片肺と置き換える「脳死片肺移植」、患者さんの両肺を摘出し、2人の生体ドナーから提供された2つの肺葉で置き換える「両側生体肺葉移植」があります。この肺移植は、当院を含めた国内11施設のみで行える治療です(2024年12月現在)。これまで当院では脳死両肺移植6例、脳死片肺移植23例、生体肺葉移植4例を実施しましたが、そのうち間質性肺炎に対する移植は19例となっており、間質性肺炎に対する肺移植は年々増加傾向にあります。肺移植を希望される患者さんは、手順を踏み、肺移植の適応が認められると日本臓器移植ネットワークに登録され、主治医のもとで治療を継続しながら適合するドナーが見つかるまで待機します。間質性肺炎は進行が早い場合もあるため、早期の段階から肺移植も視野に入れた患者管理が求められます。移植後は他科の医師、リハビリスタッフ、薬剤師、管理栄養士などを含む万全のチーム医療のもとで、栄養管理とリハビリテーションで患者さんの体力の回復を図り、退院へとつなげます。当院では、胸部悪性疾患の手術だけでなく、薬物治療、気管支鏡検査およびインターベンション治療、気胸や膿胸、そして肺移植など、幅広い分野で専門的な医療を提供しております。肺移植を目的に、関東一円の病院から多くの患者さんをご紹介いただいておりますので、間質性肺炎でお困りの患者さんがいらっしゃいましたら、いつでもご相談ください。

呼吸器外科 教授
前田 寿美子

呼吸器外科の医師として、患者さんに「息が苦しい」と訴えられたときに、しっかりと原因を突き止められるよう丁寧に対応させていただいております。バードウォッチングが趣味で、小さな体で一生懸命鳴いている姿を見るたびに命の大切さを感じます。病院周辺の木々にやってくるキツツキを見守るのも楽しみの一つです。

